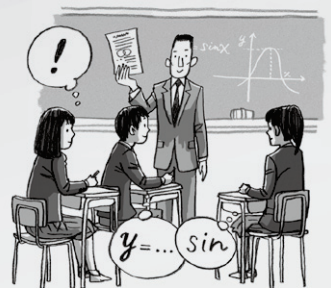


30代教師の転

起

きる！

失敗やつまずきを転機に、授業力を高める！



生徒の目線で教師の立場から 自立的な学習へと導ける授業を模索

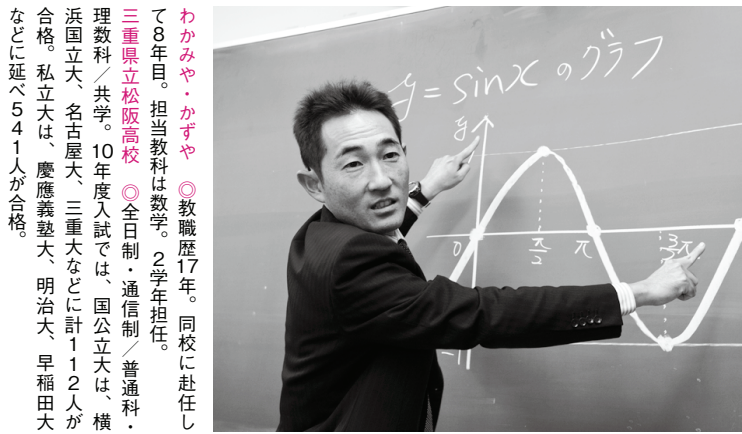
三重県立松阪高校

若宮一哉先生

38歳

私が乗り越えてきたもの

生徒との距離感が分からない



わかみや・かずや ◎教職歴17年。同校に赴任して8年目。担当教科は数学。2学年担任。
三重県立松阪高校 ◎全日制・通信制／普通科・理科数科／共学。10年度入試では、国公立大は、横浜国立大、名古屋大、三重大などに計112人が合格。私立大は、慶應義塾大、明治大、早稲田大などに延べ541人が合格。

「学校に行きたくない」。新卒で進路多様校に赴任した1年目、私は「不登校の状態」に陥っていました。赴任当初、若手の教師である自分に生徒たちは無邪気に近づいてきてくれました。ところが、それに甘えて教師としての立場をわきまえた指導が出来なかった私は、徐々に生徒との関係性をこじらせ、すっかり自信を失っていたのです。その時、支えとなったのは先輩の先生の姿でした。生徒と楽しげに話をしながらも、叱る時はしっかりと叱る。また、授業も見事でした。自分がしたい説明ではなく、生徒の分かりやすさ

を重視した授業をしていたのです。生徒の目線に立ちながら、教師の立場でいること。先輩の背中から学び、必死に指導をするうちに、少しずつ生徒の顔が私の方に向くようになりました。

「厳しく学習指導をしてほしかった」

2校目に赴任したのは県内屈指の進学校、松阪高校。私は自身の高校時代を思い出し、自主性を重んじ、効率的な学習法を伝えることが教師の役割だと意気込みました。そのため、内容によっては課題提出や補修への参加は任意としました。

思い込みから生徒任せの指導をしていた

中には成績が下がる生徒もいましたが、「進学校の生徒だから、やる気になった時に勉強すれば伸びるだろう」と高をくくり、生徒任せの指導をしていたのです。しかし、3年生になって勉強し始めても、学力は上がりませんでした。私は慌てて補習の回数を増やしましたが、根本的な学習方法が身に付いていない者もあり、自分が生徒について何も見えていなかったことに気付きました。受験を間近に控えた生徒から「1年生の頃からもっと厳しく学習指導をしてほしかった」と言われた時は、自分が教師としての責任を果たせていなかったことを痛感しました。そして、生徒には「すまんのう」とただただ謝るしかなかったのです。

そして、これからも挑み続ける目標

数学の本質的な理解を目指す

「二度と生徒を後悔させたくない」という一心で、私は自分の指導を大きく変えました。授業では課題の量を増やし、提出を義務付け、定期テストで一定の点数を取れなかった生徒には補習を受けさせました。教師が何もせず、生徒が自ら机に向かうのを待つのは、無責任な指導です。「とにかく学習させることが、教師である自分の責任だ」という気持ちでした。

結果として、受け持った生徒の成績は上がりました。ただ、同時に生徒の表情が気になり始めたのです。「先生の言葉に従って受験のために学習す

る」という姿勢になり、学びの面白さを感じていないように思われました。

目の前の生徒たちにとって本当に必要なことは何か。私は多様校での教訓を思い返し、生徒の目線で教師の立場から、指導をもう一度見直しました。

生徒の数学への関心を高める授業とはどんなものか。考えた末に、生徒に解法を覚え込ませる指導から、その仕組みを理解させる指導に改めました。例えば数列では、各項に番号を振って規則性を示し、 Σ という記号の役割を解説。更に、習得した知識を活用して正解を導く練習として、公式の機械的な適用では解けない問題に取り組みます。以前の効率重視の授業よりも、

扱える問題数は減りました。しかし今は、数学の「やり方」ではなく「あり方」を伝えて、自ら学びに向かう生徒を育てたいと感じています。

他律から自立へ導ける指導を模索

松阪高校に赴任して8年目の2010年度は、3回目の持ち上がりで2年生を担任しています。解答を途中までしか書かない「ヒント集」を作成したり、「若宮からの挑戦状」と題して成績上位層に難問集を配布したりと、生徒に考えさせる工夫をしています。その成果として、生徒が自ら考え、難問に向き合う姿勢が育ちつつあります。単に公式を当てはめるのではなく、自分で考えて解く楽しさを知れば、生徒

生徒に考えさせ、自立につながる指導を目指す

は自然と机に向かうようになる。そう実感できるようになりました。もつとも、今の指導で十分だとは考えていません。教師が現状に満足すれば、生徒はこれ以上伸びないのですから。

最終目標は、自立した生徒の育成です。進路実現に必要な学習計画を、自分で立てられるようになってほしい。究極的には、「今の自分にはこの問題集を解くことの方が大切だ」と、私がクラス全員に一律に与えた課題を後回しにするような、そんな生徒を育てたい。つまりそれは、教師である自分の手を離れていくということです。数学を入り口にして、自立して社会で生きていける力の育成を、教師人生で追究していきたいと思っています。

若宮先生 の 授業実践



Q&A

Q 生徒が自力で考え、解法を組み立てることが出来るよう、指導をどう工夫していますか？

A 家庭学習用に生徒に配布している問題集の「ヒント集」を自作しています。生徒に考えさせる狙いから、解答をすべては書かず、途中から空欄にして配布します。数学が苦手な生徒も、解法を丸写しにするのではなく、考えながら解くことが出来ます。得意な生徒にも必要に応じて参照するよう指導しています。

またヒントは、すべて私が手書きします。「先生もこんなに頑張ってるんで」という気持ちを伝えることが、「先生の頑張りに応えられるよう、手を抜かずに取り組みよう」という生徒の意欲を引き出すのです。

Q 数学に苦手意識を持つ生徒が、モチベーションを維持しながら学習できるように、どのような取り組みをしていますか？

A 定期テストの点数が一定以下の生徒に、週1回補習を課しています。しかし、間違えた問題を復習させるばかりでは、「ここが出来なかったやないか」と生徒を責めるような指導になってしまいます。苦手意識を持つ生徒の意欲を更に削ぐようなことがないよう、復習に加えて、次の定期テストに向けた対策や授業の予習も行います。補習を受けた生徒は先取りして理解しているため、授業への集中力も増します。

出来なかったことを責める補習ではなく、「次につながる補習を心掛けています。

メッセージをお寄せください

◎更なる授業力の向上を目指す若宮一哉先生へメッセージをお願いします。同じ課題を抱えている同世代の先生の共感の言葉、独自の授業スタイルを確立された先輩からの応援やアドバイスなどを自由にお寄せください。編集部より、若宮先生へお届けします。

下記のe-mailアドレスにメッセージを送信ください

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp